



Title	子宮内膜癌における銀好性細胞とその臨床的意義に関する研究
Author(s)	佐藤, 安子
Citation	大阪大学, 1988, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/36577">https://hdl.handle.net/11094/36577</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【32】

氏名・(本籍)	ま とう やす こ 佐 藤 安 子
学位の種類	医 学 博 士
学位記番号	第 8 2 6 8 号
学位授与の日付	昭 和 63 年 6 月 9 日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	子宮内膜癌における銀好性細胞とその臨床的意義に関する研究
論文審査委員	(主査) 教 授 谷 澤 修 (副査) 教 授 藤 田 尚 男 教 授 森 武 貞

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 〔目 的〕

近年、銀好性細胞はカルチノイドのみならず、種々臓器の腫瘍においても認められている。婦人科腫瘍についても、卵巣ムチン性腫瘍や子宮頸部小細胞癌にかかる細胞の存在が認められているが、子宮内膜癌については1977年の我々の記載が最初である。本研究では子宮内膜癌における銀好性細胞の検索とその意義に関する臨床病理学的解析を目的とした。

### 〔対象及び方法〕

大阪大学病院及び大阪府立成人病センターに於ける1966年から1983年までの18年間の子宮内膜癌症例229例の内臓癌組織のホルマリン固定パラフィン包埋切片について、ヘマトキシリン・エオジン染色及びグリメリウス染色を施した。更に組織学的診断に必要な場合はPAS染色及びアルシアン・ブルー染色を追加した。全症例229例のうち組織学的に内臓腺型内膜癌と確定診断された187例について臨床病理学的解析を行った。

### 〔成 績〕

#### 1) 銀好性細胞の形態学的検討：

グリメリウス染色陽性の銀好性細胞は187例中69例に認められた。これら銀好性細胞は形態学的にI型およびII型の2種類に分類された。I型細胞は消化管の銀親和性細胞に類似して三角形の形態を示し、内臓腺癌上皮の間に孤立或いは数個連続して基底膜上に並んでいる。このような細胞は11症例に認められた。II型細胞は内臓腺癌上皮と全く同じ形態を示し、銀好性顆粒が細胞質全体或いは細胞先端部に認められ多数の銀好性細胞が連続して存在することが多い。この様な細胞は57症例に認められた。1症例

にⅠ型細胞とⅡ型細胞が同等に顕著に認められ、これは今回の臨床病理学的解析から除外した。

## 2) 臨床病理学的検討：

銀好性細胞の有無と年齢、月経、妊娠、経産などとの間には特別な傾向はみられなかった。高血圧合併頻度については、Ⅰ型細胞を有するもので27.3%、Ⅱ型細胞を有するもので33.3%、銀好性細胞を有しないもので14.7%、糖尿病合併頻度については夫々9.1%、8.8%、1.7%であり、銀好性細胞を含有する子宮内膜癌症例で高血圧および糖尿病の合併頻度が高い傾向が認められた。

銀好性細胞の有無と子宮内膜癌の組織学的分化度及び臨床進行期との間には特定の関係はみられなかった。しかし高分化型腺癌のみについて検討すると、リンパ節転移がⅠ型細胞を有するもので33.3%、Ⅱ型細胞を有するもので21.7%、銀好性細胞を有しないもので8.3%に見られ、銀好性細胞を有するものは有しないものに比較してリンパ節転移の頻度が高い傾向を示した。分化度の低い腺癌についてはこのような傾向は認められなかった。筋層浸潤についても、高分化型腺癌では銀好性細胞を有するものは有しないものに比し、より浸潤する傾向にあった。又、生存曲線についても、高分化型腺癌では銀好性細胞を有するものは予後の悪い傾向を示した。

### 〔総括〕

1) 子宮内膜癌において初めて銀好性細胞の存在を認めた。形態学的に少なくとも2種類が存在し、消化管に認められる銀親和性細胞に類似し三角形の形態を有するものをⅠ型細胞、子宮内膜癌に特異的に認められ腺癌細胞と同様の形態を示し銀好性顆粒が細胞質全体或いは先端部に見られるものをⅡ型細胞と命名した。

2) 子宮内膜腺癌に於ける銀好性細胞は高血圧や糖尿病と共存する頻度の高い結果が得られ、これらの内分泌学的関連性が示唆された。

3) 子宮内膜腺癌に於ける銀好性細胞の存在は、高分化型腺癌については、リンパ節転移率、筋層浸潤度、生存曲線などから、予後不良因子の一つと考えられた。

## 論文の審査結果の要旨

婦人科領域の腫瘍で銀好性細胞を有しアミン或いはペプチドホルモンを産生するいわゆるAPUD系腫瘍の存在が最近注目をあび、卵巣腫瘍あるいは子宮頸癌について報告されている。本研究は子宮内膜癌において初めて銀好性細胞の存在を明らかにし臨床病理学的解析を行った。形態学的に少なくとも2種類が存在し消化管に認められる銀親和性細胞に類似し三角形の形態を有するものをⅠ型細胞、子宮内膜癌に特異的に認められ腺癌細胞と同様の形態を示し銀好性顆粒が細胞質全体或いは先端部に見られるものをⅡ型細胞と命名された。銀好性細胞の存在は高分化型腺癌についてはリンパ節転移率、筋層浸潤度、生存曲線などから予後不良因子の一つと考えられた。又、これら銀好性細胞は高血圧や糖尿病と共存する頻度の高い結果が得られこれらの内分泌学的関連性が示唆された。

本研究結果は今後臨床診断ないし治療に際して役立つものであり、学位論文として価値あるものと認められる。